

「学習サイクル」の提示と継続 ～毎回の授業における「予見・遂行・省察」の実行～

東山中学・高等学校 澤田 寛成

実践背景

【中高一貫コースの問題点】 習熟度の低い生徒の中には、「やらないからできない」「学習意欲が低い」などの否定的な言葉を他者から浴びせ続けられ、自己肯定感が下がってしまっているケースがある。残念ながら、本校の中高一貫コースには、一人で行う継続学習まで辿り着けず、理解に苦しみながら授業を受けることになってしまっている生徒が一定数いる。

【解決すべき課題】 自身での数学的な処理をできないまま授業を終えてしまうという状況を打開する必要があると考える。諦めずに自ら考えることができるかが鍵となる。

【仮説】 「予見・遂行・省察」の継続的な実行により、意味理解志向が強まる。

【目ざしたい成果】 予習・復習の方法を体感し、「学び方次第で自分もできる」と考えることができるようになる。

実践方法

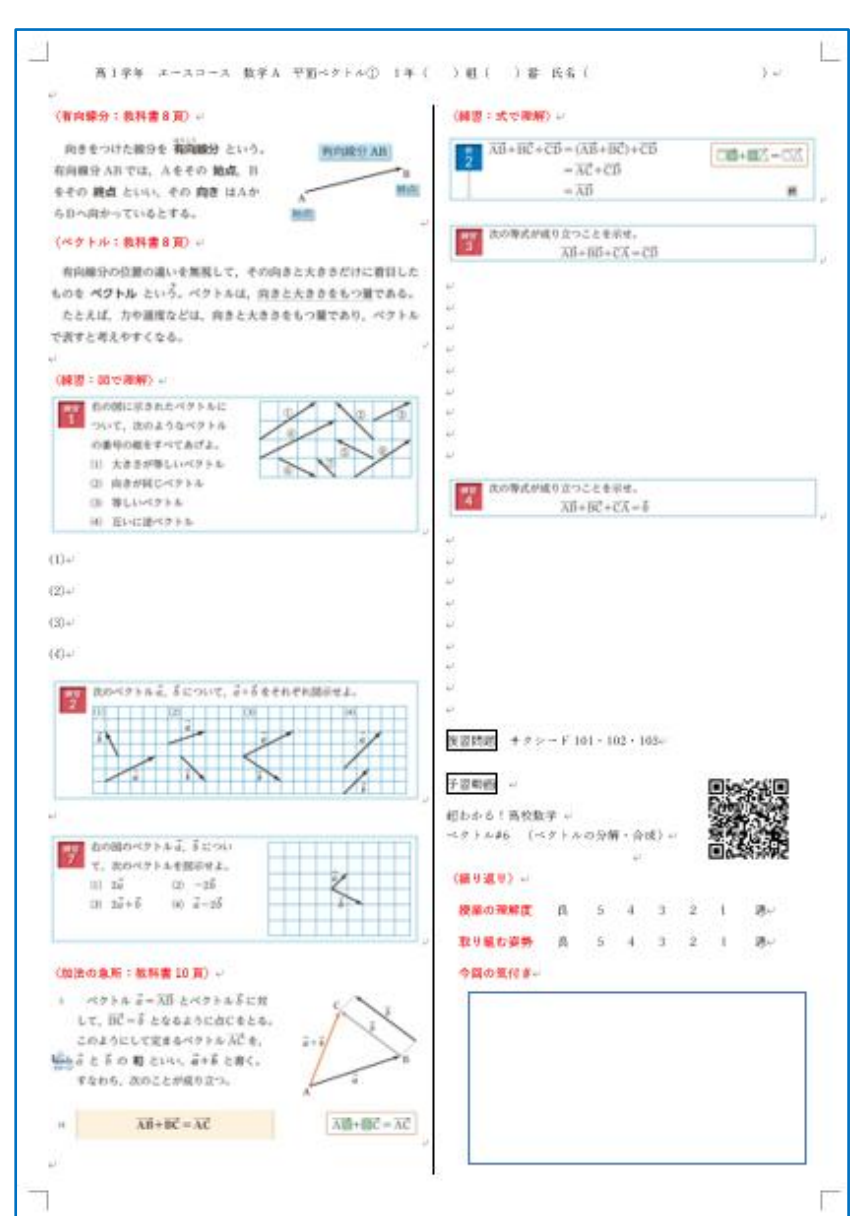
【対象】 高1学年エースコース(58名)

【科目】 数学A(3単位)

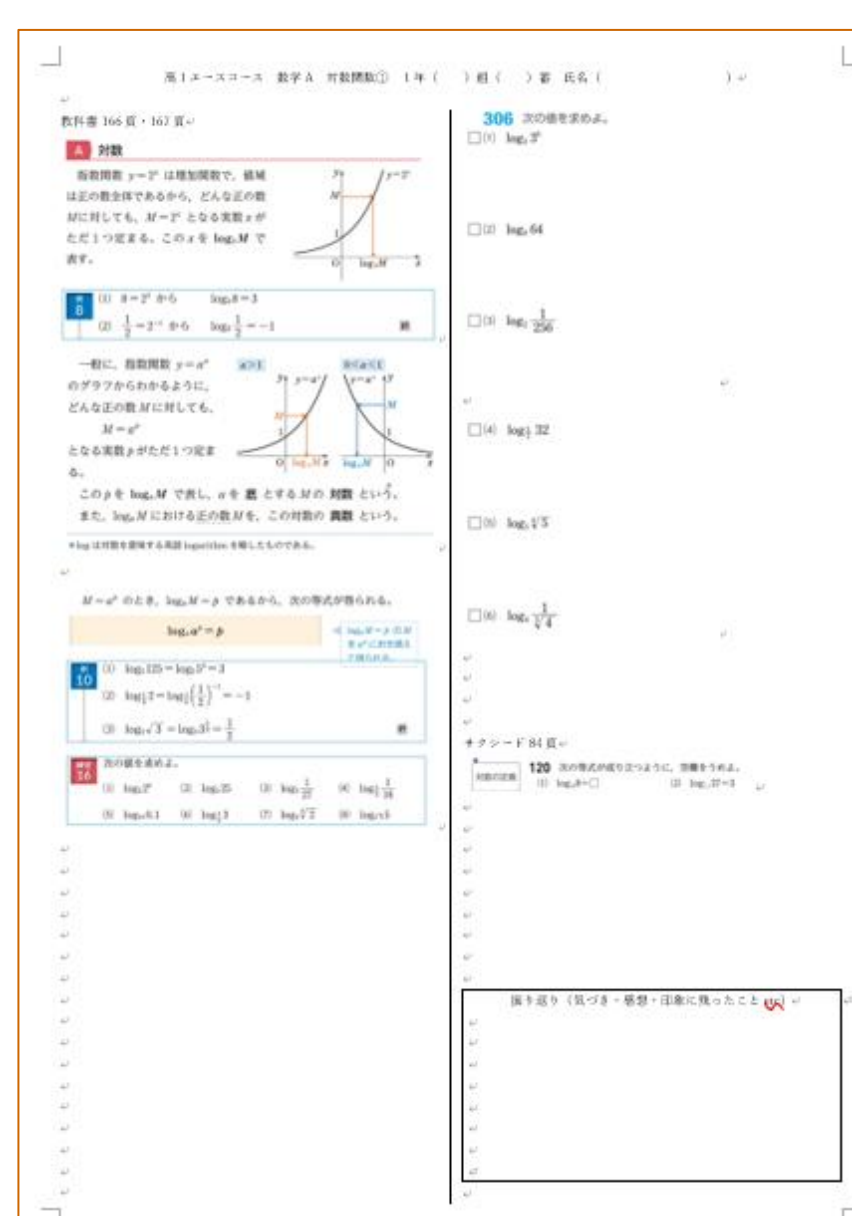
【内容】 B4用紙1枚のプリントを1回の授業内容とし、各授業のテーマを一つに絞った形での授業を展開する。また、この1枚のプリント内に、振り返り欄、予習問題、復習問題を入れ、次回に提出を求めることにより、振り返り・予習・復習でやるべきことを見せ続ける。

【実施期間】 1年間

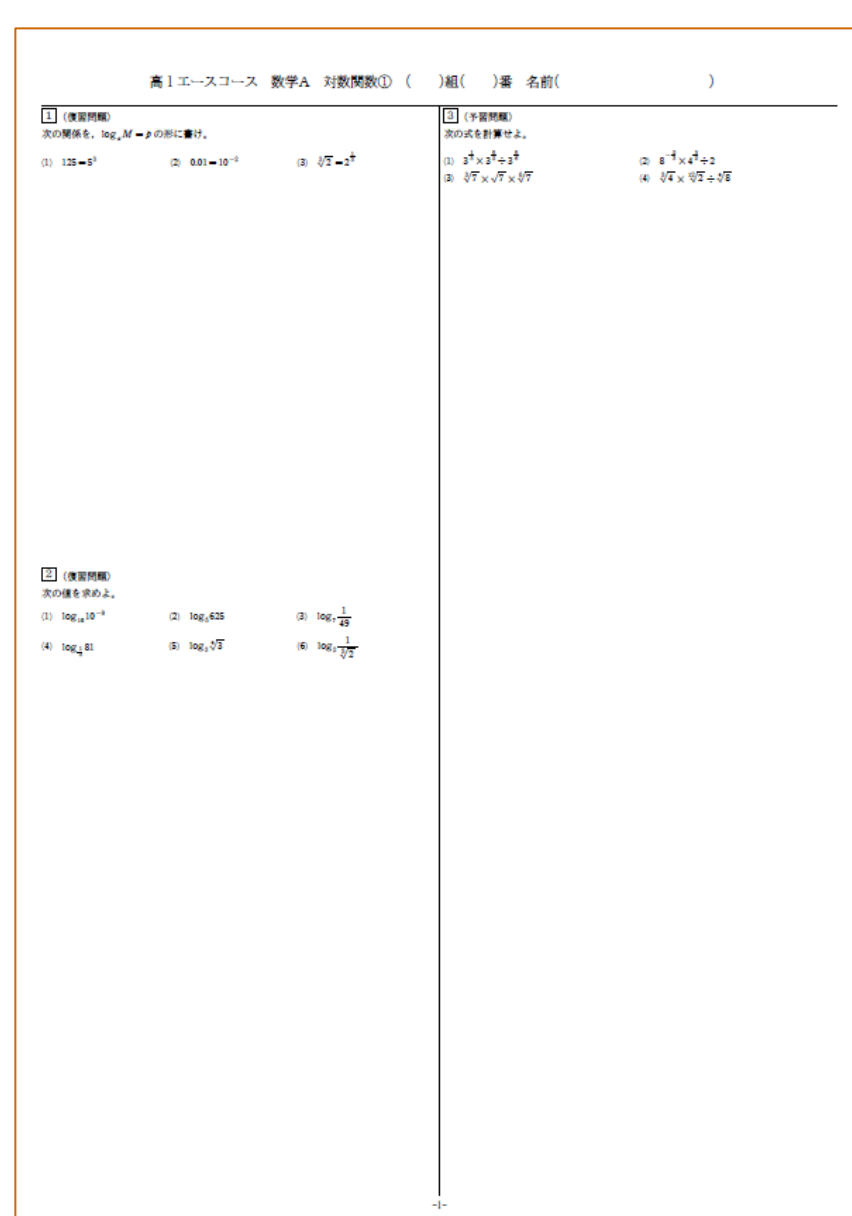
【方針】 生徒の理解度に合わせ、プリント問題を作成する。ただし、到達度の高い生徒にも目を向けることも意識し続けるために、教科書傍用問題集(サクシード)の重要例題は全問解説することにする。進度についても、本校のシラバスに合わせ、速く進むことがあっても、遅くならないように心がける。尚、特に重要と感ずる問題については、教え合いの時間を取り、理解の定着を図ることとする。



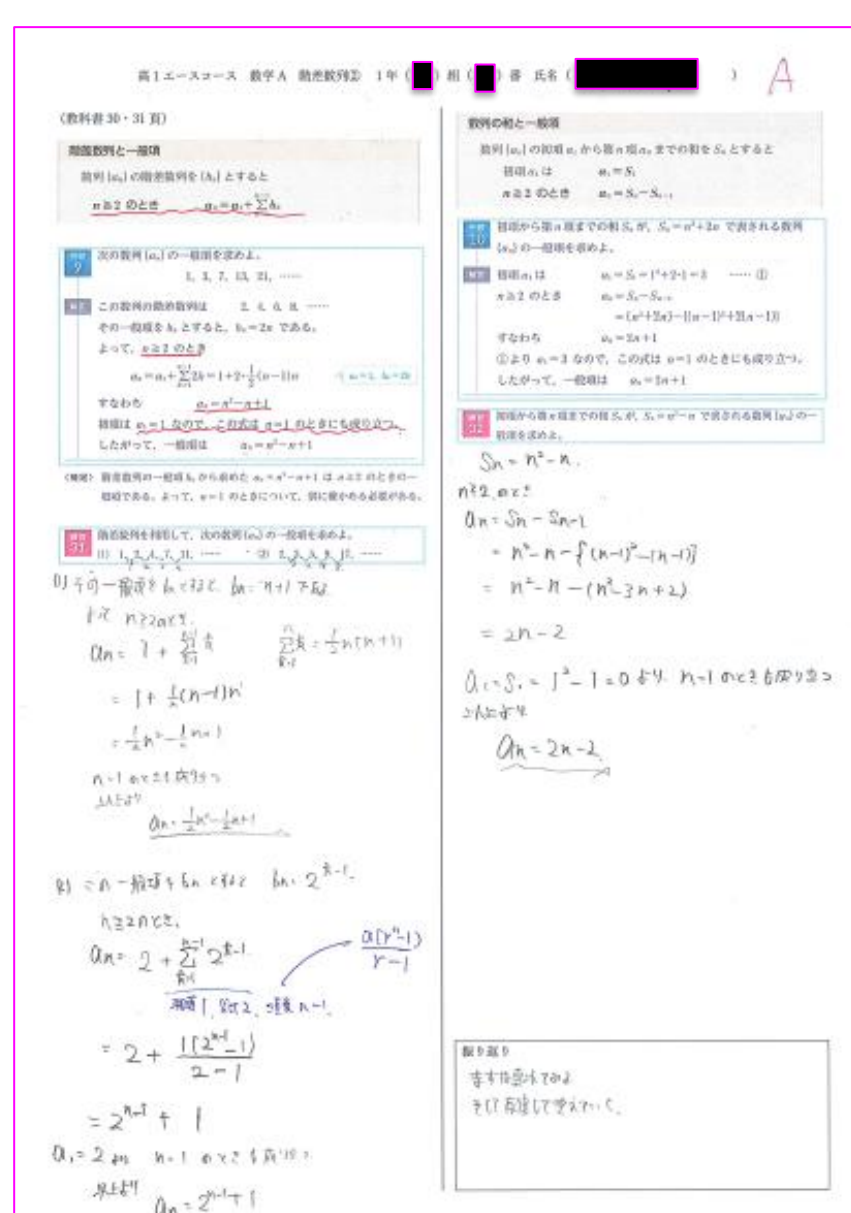
【4月(片面1枚)の作成例】



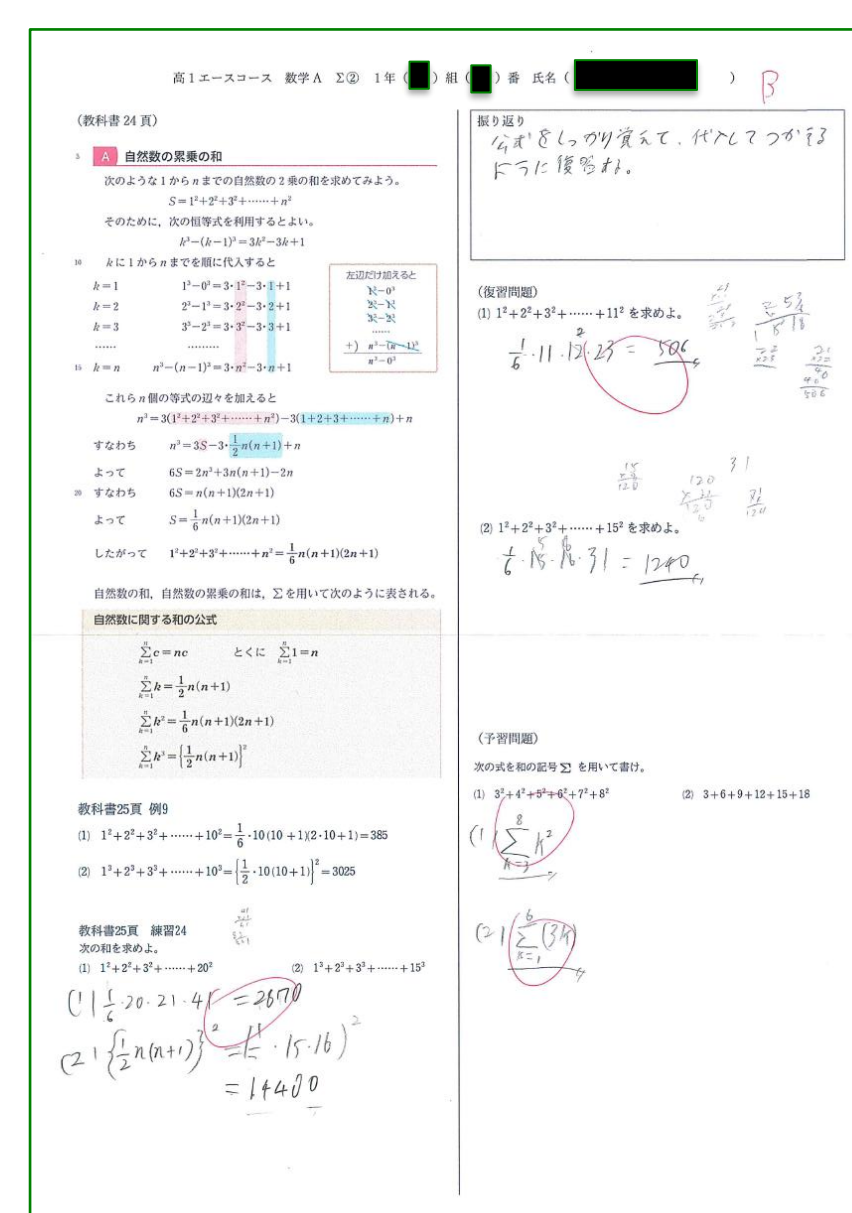
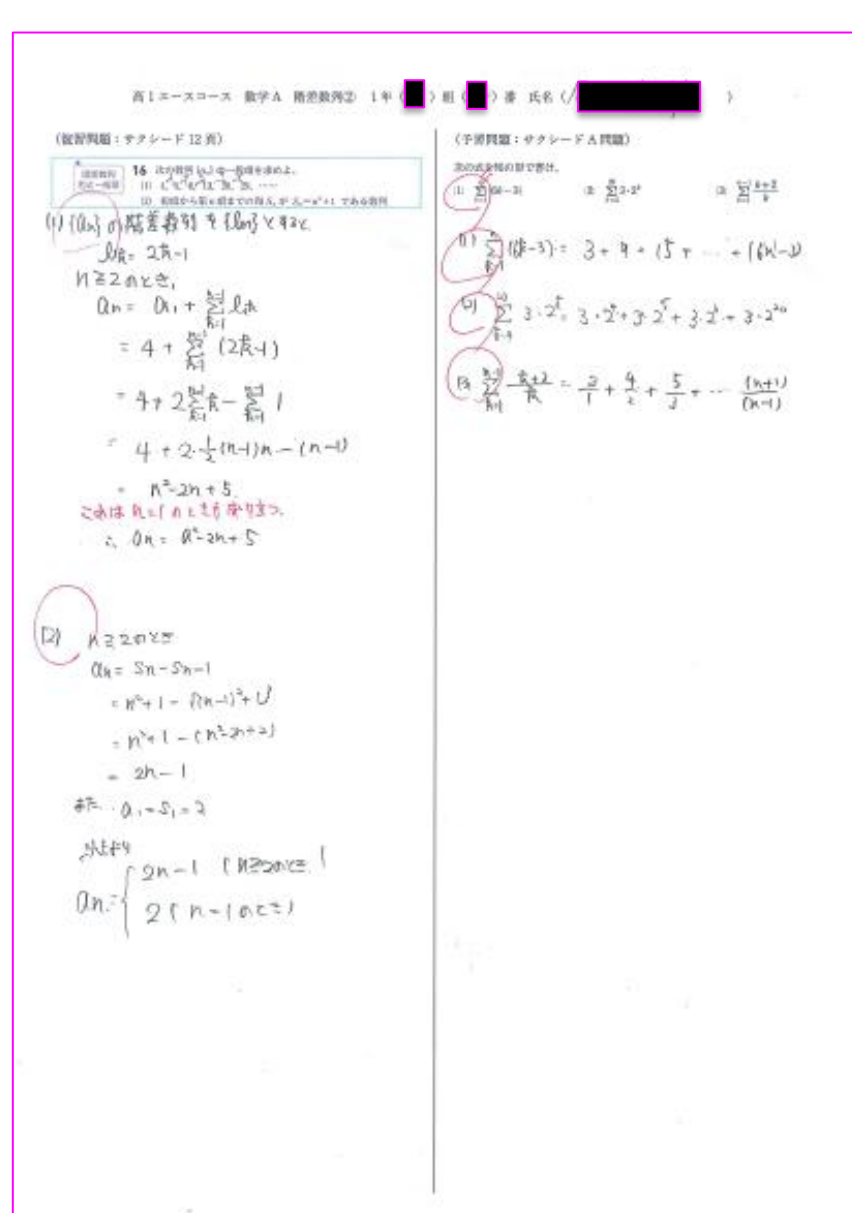
【10月(両面1枚)の作成例】



【1月(片面1枚)の記入例】



【1月(両面1枚)の記入例】



【1月(片面1枚)の記入例】

取得データおよび検証方法

【取得データ】

1. 学習動機調査・学習観調査の実施(5月・11月)

- ・高校全学年全コースで実施
- ・教科や科目を入れずに統一項目として調査

2. 授業アンケート(12月中旬)

- ・授業の理解度、難易度、スピード
- ・宿題の量、テストの難易度、授業教材
- ・授業について、学力を伸ばすには？(自由記述)
- ・家庭学習について、今後大切にしたいもの(自由記述)

3. 定期考査との関係

- ・定期考査の得点とプリント記入内容の評価との関係

【検証方法】

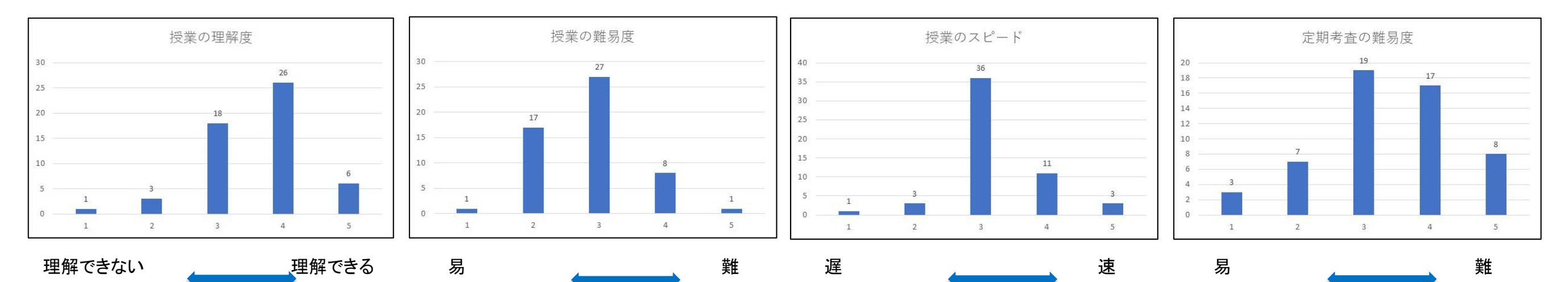
1. 学習動機調査と学習観調査では、5月と11月の平均値の変化を基に検証した。
2. 授業アンケートでは、授業と家庭学習に対する思いを中心にデータと自由記述を用いて検証した。
3. その他として、プリント記入内容と定期考査の得点の相関を検証した。プリント記入内容については、評価が一番低い10月中旬のものを選び、評価が高かった10名と比較した。

結果

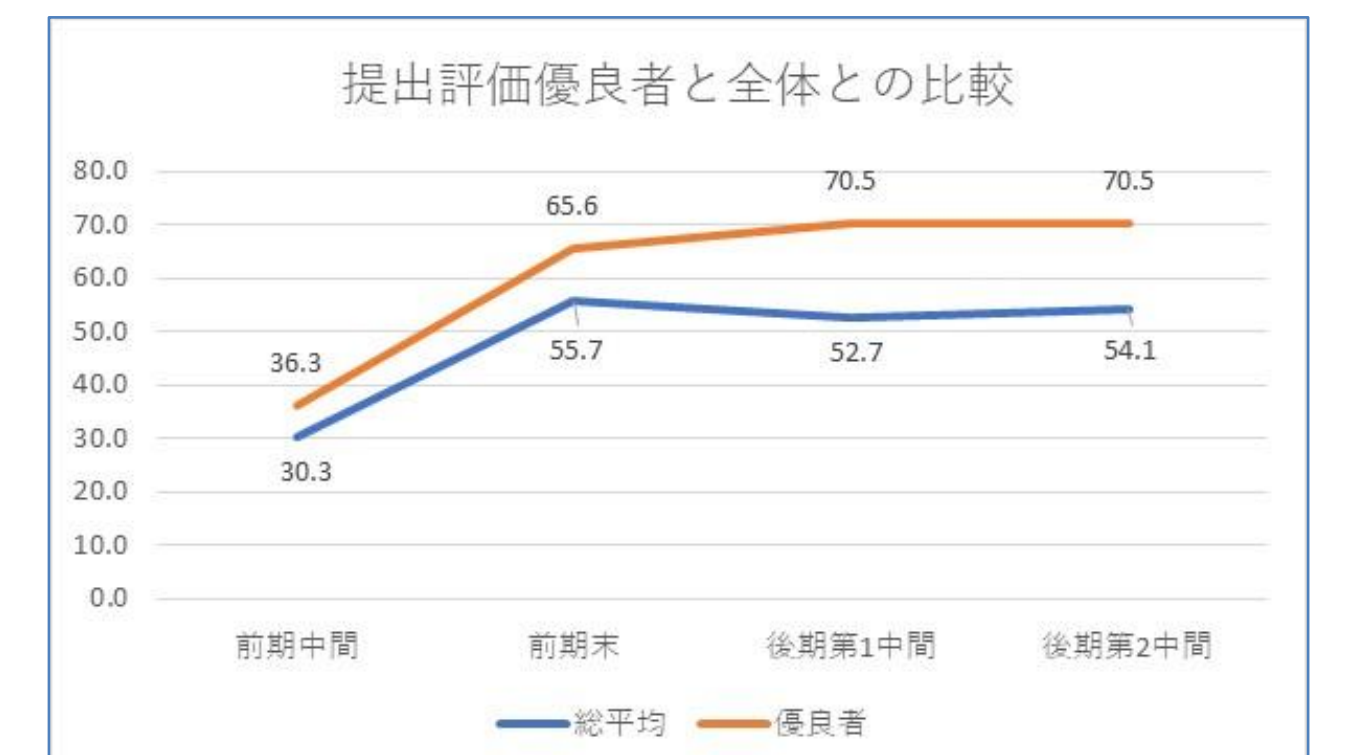
【学習動機調査・学習観調査】 意味理解志向における変化は得られなかった。“習ったことのつながりを整理すると覚えやすい”が4.48ポイント(5月)から4.77ポイント(11月)に0.29ポイント増加するなど小さな変化は現れたが、数学の授業によるものとは考えていない。

	内容関与動機	内容分難動機	暗記志向	結果志向	物量志向	環境志向	意味理解志向	失敗活用志向	思考過程重視志向	方略志向
5月	4.52	3.97	3.69	3.65	4.59	4.11	4.53	4.60	4.49	4.96
11月	4.43	3.81	3.81	3.95	4.48	3.87	4.53	4.56	4.48	4.87
11月-5月	-0.09	-0.16	0.12	0.30	-0.11	-0.23	0.01	-0.04	-0.02	-0.09

【授業アンケート】 授業のスピードは、ちょうど良かったようである。「学力を伸ばすためには？」の自由記述では若干ではあるが、「積み重ねと予習復習、量」「日々習ったことの復習、時間があれば予習をすること」等、学習サイクルを含めた内容が見られた。



【定期考査との関係】 前期中間考査は平均点が低いため比較しにくい面がある。しかし、授業だけでなく、予習・復習・振り返りを真面目に取り組んだ生徒は一定の成果は得られていることは分かる。



考察と今後の課題

年度当初のプリントは、生徒の実態を把握できておらず、予習課題が適切でなかった。その後、改善を図ってはいるものの、現在も、予習・復習をしない生徒の割合が多い。如何に手軽な予習課題、復習課題を設定するかが課題である。今後は、次の3点を意識したいと考える。

- ・予習課題や復習課題を選択制にするなど、自由度を上げる。
- ・予習課題や復習課題をクラスメートに採点してもらう。
- ・教員が手をかけ過ぎない。

主体的な英語学習者を育てるための授業デザイン

東山中学・高等学校

中村 憲幸(英語科)

実践背景

現状 中高一貫校男子校で、6年間もあずかっているにもかかわらず英語が不得意あるいは嫌いになってしまう生徒が少なくない。

仮説 英語をツールとして意識させる(内発的動機を高める)ことで継続的な学習ができ、英語が不得意あるいは嫌いな生徒が減るのではないか。

授業作りのねらい(中1～現在に至る)

- ①オーセンティックな英語に触れる
- ②英語の学習と①とを結びつける
- ③飽きさせない

中学1年～高校1年までの取り組み

多読×英文法を中心。⇒英文法は洋書を読むためのもの、**英語は洋書を読むためのツール**という初期の意識付けが奏功した。

今年度(高校2年生)の実践内容

対象クラス: 高校2年中高一貫(3クラス111名)

特徴: 受験勉強熱が高まりつつある

実践内容: リーディングを軸にしつつも、さらに学習動機を高めるために様々な授業内容・形式を用いた。

【ベースの授業内容】

- ・リーディング(講義)
- ・多読(読む時間を必ず週に1コマ作って図書館で実施)

【今年度から取り入れた活動】

- ・英作文(=瞬間英会話)(演習+講義)
- ・探究「的」授業(リーディング→個人で調べ学習→プレゼン)
- ・入試問題(演習→講義)
- ・オンライン英会話(希望者のみ)
- ・有名文学作品に触れるゼミ(希望者。講義)

【英語の授業の枠組み】

- ・コミュニケーション英語A(中村が担当): 週に4単位
→リーディング、英作文、入試問題演習、探究「的」授業など
- ・コミュニケーション英語B/C(別の教員が担当): 週に2単位
→1時間は多読、もう1時間はリスニングとプレゼンテーション
- ・8限授業(希望者。もう一人別の教員が担当): 週に1単位
→有名文学作品に触れるゼミ形式。かなりハイレベル。

☆中学までは2人の教員、高校からは3人の教員で役割分担

☆英語学習をあくまで**情報収集・情報発信のためのスキルの涵養と意識させる**

☆**オーセンティックな英語に触れる機会をできる限り増やす**

取得データおよび検証方法

・12月に実施した授業についてのアンケート(学習動機・学習観・面白い/有意義と感じた内容などについて)
⇒生徒の学習動機・学習観、内容に関する意見を吸い上げる。

・生徒の自発的な行動や他学年との英語の成績の比較
⇒肝心の英語力を涵養できているのか判断する。

結果

①英語に対する学習観

項目	回答数(n)	割合(%)	平均偏差値 (11月進研模試)	英語を勉強する目的		
				回答数(n)	割合(%)	
好き	32	34.41%	69.88	大学受験	76	81.7%
どちらかと言えば好き	33	35.48%	64.85	将来英語を使うため	10	10.8%
どちらかと言えば好きではない	25	26.88%	60.44	面白いから	6	6.5%
好きではない	3	3.23%	61.33	その他	1	1.1%
合計	93	100.00%	-	合計	93	100.00%

⇒約70%の生徒が好きな状態で英語学習5年目を迎えている。
一方、大半の生徒の英語の学習動機は大学受験であった。

②英語力: 通常形式クラスとの成績推移比較、過年度比較(別紙)

③生徒の行動の変化

英検/ TOEFL / IELTSの自主的受験

観光ボランティアの企画・運営

海外研修(学校外のもの)への参加

他言語の習得(イタリア・ドイツ・ロシア・中国・フランス・韓国など)

④生徒が面白いと感じたこと

面白かった取り組み(複数回答)	回答数(n)	取り組みが面白いと感じた理由(自由記述を分類)	回答数(n)
(1) リーディング	51	(1) 新たな知識を得られる	42
(2) 英作文	39	(2) 成長を実感できる	23
(3) 多読	31	(3) 将来や実用につながる	18
(4) 入試問題	26		
(5) プレゼン等スピーキングの機会	23		

考察と今後の課題

考察

☆中学の段階で洋書を読むこと(オーセンティックな英語)が英文法等の英語学習の動機となったことはその後の英語学習の継続と英語力の涵養に深くかかわっていると考えられる。

☆高校では、さらに**スピーキングや、英作文(瞬間英会話)といったアウトプットが英語学習の動機**に加わり、また、リーディングでも**新たな知見を得られるような文献**を与えることで好奇心が高まっている。

☆アンケート結果では大半の生徒が英語学習の目的は大学受験としていたが、面白いと感じた理由を見ると、**内発的動機も高まっている**ようには感じる。

今後の課題

30%程度の生徒が、英語を嫌いになってしまった。また、大学受験が無ければ英語は全く勉強しないと回答した生徒が30%程度いた。苦手意識の克服の一助となる授業デザインの必要性を感じる。
また、生徒の変化を測るよう複数回にわたり同様のアンケートを実施すべきであった。